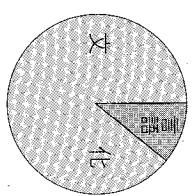
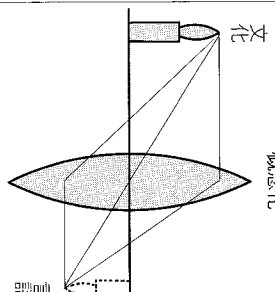
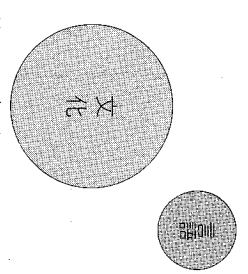


# 4 1-4 言語と文化(4)「言語と文化の関係」

<p>言語は文化である。</p>	<p>言語は文化の投影である。</p>	<p>ある言語を選ぶことは、その文化の価値体系を選ぶことである。</p>	<p>言語は文化と別個に扱うべし。(必ずしも一致しない)</p>
<p>論拠</p> <p>伝達の「道具」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>learned</li> <li>shared</li> <li>transmitted</li> </ul> 	<p>論拠</p> <p>宗教、食事、冠婚葬祭など、「文化行動」は、言語にシンボライズされる。これら文化の各々にアプローチするとき、言語(用語・表現形式など)を手がかりにすると、枚挙・分析ともに、最もやり易くなる。</p> <p>「言語は、登録済みの文化項目である」 (computational)</p> 	<p>論拠</p> <p>語彙体系も表現形式も、ある文化がウエイトをかけている分野において豊かである。はじめは言語の形態のみを導入利用しているつもりでも、その内的構造や価値体系は、その利用者のイメージの世界をも次第に支配するようになる。(価値観・世界観)</p>	<p>論拠</p> <p>言語は独り歩きすることがある。</p> <p>大阪の言語は神戸の言語より京都のそれに近いが、言語以外の行動構式において、大阪(文化)は神戸の方に近い。 (文化的親近感)</p> <p>言語 京都——大阪——神戸 文化 京都——大阪——神戸</p> 
<p>子め敷設されたレールの上しか走れない汽車のように、人の思考は文化のパターンに従ってしか展開しない不自由なものである。(サピア・ウホーフの考え) (以下、「文化」という語は、言語を除いた狭義の文化を示すものとする。)</p>			